

いしかり暦

石狩市郷土研究会創立六十周年記念講演
近代北海道と石狩 - 明治期を中心に -

関 秀志

石狩市郷土研究会会誌「いしかり暦」第34号
2021.3

石狩市郷土研究会創立60周年記念講演
「近代北海道と石狩—明治期を中心に—」

関 秀志

話しすることから始めたいと思います。北海道史の視点から石狩の歴史を見ると、石狩の特性と、全道、全国と共通する両方の側面が見えてくると思います。

はじめに

伝統のある石狩市郷土研究会の創立60周年という記念すべき時に、講演の機会を与えていただき、お札を申し上げます。今年の春、講演のお話をいただいたときに、北海道史研究協議会がこちらの研究会に大変お世話になつてまいりましたので、お引き受けしなければいけないとは思つたのですが、いつたいどのような話をすれば、地元の研究会の皆様に多少でもお役に立てただけるかなと考えました。石狩のことは、地元の皆様が良く知つておられるので、違つた視点から見えた石狩の歴史についてお話をさせていただきました。私は北海道の近・現代史を開拓を中心に、地方史・地域史というか郷土史に近い視点で、60数年間研究してきましたので、そのような立場から、よそ者から見た石狩の歴史、特に明治期の特色は一体どういうことなのか、というようなことを、雑駁な話になるかもしれません、お話をさせていただこうと思います。

さて、地域の歴史を研究する際には、二つの側面からのアプローチが大事だと思います。一つは、地元の個々の具体的史実を丹念に調べることです。それからもう一つは、地元の歴史事象が、北海道や日本の近代史と、どういうかかわりを持っているかを調べることです。二つの視点から全体的・総合的に見ていくと、地域の特性と普遍性が良く見えてまいります。昔、戦前の郷土史を見ますと、お国自慢に終わつてしまつている歴史が少なくありません。優れた郷土史ももちろんありますが、独善的な視野の狭い歴史、郷土史に陥らないためには、ミクロとマクロの両視点から地元の歴史を見ることが大切だと思います。それではまず、北海道の近代、特に明治期の特色について、簡単にお

I 北海道近代史の特質

1. 近世から近代へ

ご承知のように、江戸時代の道南地方は和人地で、それ以外の大部の地域は、蝦夷地（先住民族アイヌの居住地）と呼ばれていました。道南の和人地には、松前藩を通して幕府の権力が及んでいましたが、蝦夷地には、国家権力が直接は及ばず、場所請負人と呼ばれる、藩、あるいは幕府が蝦夷地を直轄した時代には幕府から、場所の經營を請け負つた特権商人を通して間接的な力がおよんでいました。江戸時代の北海道は、このように、地理的・民族的に二分化された地域でした。それが明治2年（1869）に、蝦夷地を北海道と改称し、国と郡が置かれて、全道が国家の領域に完全に組み込まれました。

このように、明治初期に、近世のシステムが近代のシステムに転換するわけですが、どのようなプロセスで、どのような問題を起こしながら変わつていったのかということが、まず、明治初期の北海道史を見る場合の大きな関心事のひとつであります。

2. 開拓の時代

さて、明治時代の北海道は、どういう時代かと一言でいうと、開拓の時代だといえます。開拓には光の当たる表の部分と影の部分とが当然あるわけです。最近はどちらかと云うと、影の部分について、いろいろ議論されたり、反省されたりするようになつてきましたが、その評価は別として、開拓の最盛期でした。

例えば人口の増加を見ますと、明治5年（1872）には、北海道の人口はアイヌの人たちも含めてわずか11万人です。ところが、

明治末期には170万人に達し、太平洋戦争が終わった昭和20年（1945）には、350万人を超えた。全国でこれだけ急激に人口が増えた府県はありません。

耕地面積、田畠の面積は、明治5年にはわずか3,000町歩です。1町歩は約1ヘクタールですから、約3,000ヘクタールです。それが、明治末期には約60万町歩、敗戦の昭和20年には80万町歩になります。その結果、明治初期には、北海道は寒冷で農業（特に米作）に不向きな土地だといわれていたのですが、日本有数の農業地帯に発展しました。

しかし、その一方で、明治政府の開拓政策・同化政策により、アイヌ民族の伝統的社会・文化が破壊されたことは、皆さんご承知のとおりです。

それから、住民、道民の性格が府県とかなり違います。その最大の違いは、先住民族アイヌが暮らしていることが一つ。もう一つは、本州の府県各地から多様な職業、身分の人が寄り集まって移民社会が成立したことです。

3. 「内国植民地」としての役割

それから、日本の近代史の面からいいますと、明治初期は、世界史の上では、資本主義の発展期で、欧米の諸国が海外に植民地を求めて、競争していた時期であります。日本は出遅れましたから、もちろん海外に植民地を求めるることはできない。その結果、国内で植民地に相当する地域として期待されたのが北海道でした。研究者は「内国植民地」と呼びます。明治初期に、日本の領土に完全に編入されたのは、北は北海道、南は琉球（沖縄）ですが、琉球は開発の対象になる地域ではありませんでした。

4. 北方圏、特にロシアとの関係

対外的なことからいいますと、日本の中でも外交的に北方地域との関係が最も深いのが北海道です。特にロシアとの関係が深く、明治初期の大きな領土問題は、南方では、琉球と小笠原であり、北は千島と樺太でした。日露間のサハリンやクリル諸島をめぐる領土問題や北方の緊張は、北海道の近代史に、大きな影響を与えた結果、樺太アイヌの強制移住が行われ、明治時代の北海道開拓で重要な役割を果たした屯田兵制度も、こうした時代背景のもとでスタートしました。さらに、第七師団が札幌に置かれたことも、後に旭川に移りましたが、そういう背景と関係が深いわけです。

5. 欧米技術文化導入のモデル地区

次に、産業技術や文化の面からいいますと、明治の初めは、国策として、富国強兵・殖産興業政策に力を入れた時期ですが、そのモデル地区というか試験場的役割を果たしたのが北海道です。明治5年（1872）から14年までの10年間に、国の予算のおよそ1年分の資本を、北海道開拓に投入しました。明治以降の北海道の特色の一つとして、国策による開拓、拓殖が挙げられます。国家予算の割合で言うと、明治初期の10年間が、国が最も北海道に予算を投入した時期です。

広大で、本州とは気候風土の違う北海道を日本在来の技術で開発することは無理だということで、欧米の技術や文化を導入しました。本州はヨーロッパからの技術者が中心ですが、北海道の場合は開拓使が主にアメリカから多くの技術者、専門家を招いて、農業、鉱工業、道路・鉄道・港湾建設、教育、生活文化など多方面にわたり開拓に力を注ぎました。この試みは、その後も、北海道に大きな影響を及ぼしています。

6. 主要産業の発達

次に、明治期の北海道の産業の動向を見ますと、明治30年（1897）代までは、漁業が北海道の産業をリードしていました。年によつて違

いますが、漁業生産の7、8割以上は鯨が占め、漁獲された鯨の9割以上は鯨ノ粕に加工されていました。先ほど北前船の話が出てまいり

ましたが、このメ粕は、北海道の代表的な産物として、北前船で本州に移出されていました。現在の石狩市内では厚田と浜益が鯨の産地でした。一方、鯨に比べると生産額、生産量は少ないです、北海道の代表的な水産物として全国的に知られていたのが鮭で、その主産地が石狩でした。

農業については先ほども触れましたが、明治になつて国が力を入れた結果、30年以上たつて、ようやく主要産業に躍り出ます。

さらに、大正期の第一次世界大戦中の好景気の時代に、鉱工業の生産が伸び、農業生産を上回るようになります。しかし、農業と漁業は、大正以降も依然として北海道の基幹産業です。

7. 道民の特性と文化

このほか、道民の特性、文化の特質については、北海道の住民が先住民族アイヌと本州から移住した和人であることから、アイヌ文化と日本各地の民俗・伝統文化が混在していること、先ほど述べましたように、国策を背景として導入された歐米文化の影響がみられること、北海道の厳しい自然環境、特に雪と寒さに適応した文化が形成されつあつたこと、などを挙げることができます。

II 石狩地方近代史（石狩・厚田・浜益郡）の諸相——明治期を中心

次に、これまでお話をした北海道の動きを念頭に置きながら、石狩の歴史を見ていきたいと思いますが、これから話すのは、石狩のことは

あまり詳しくない北海道史の一研究者が、石狩の歴史的な土地柄を知ろうとして試みた方法で、私の試論、骨組みに過ぎないことをお断りしておきたいと思います。

1. 地域史の特色を生み出す地理的背景

石狩の歴史を考える場合にまず重要なのは、その地理的な環境、条件であります。

一つは日本海です。海との関係からいようと、産業では鯨を中心とする漁業があり、当時は交通運輸の動脈だった海運があります。そこで活躍した北前船の話は前にも出ましたが、明治30年頃までは、本州と北海道をつなぐ主要な手段でした。

もう一つは、北海道最大の石狩川です。漁業では有名な鮭漁があり、明治・大正期には石狩川航路の水運が盛んでした。そして、海運と河川交通の要地だった河口の石狩に市街地が発達しました。

それから原野です。これは開拓が進展し、農村が形成された地区であります。

次に、地質・地下資源はこの地域にどんな影響を与えたでしようか。地下資源でいいますと、油田の開発が行われました。日本の鉱業では、北海道は全国有数の産炭地でしたが、石油はあまり注目されません。しかし、北海道の中では石狩の石油は、主要な位置を占めます。

近隣の都市の存在も地域史に大きな影響をもたらします。一つは札幌であり、一つは小樽です。ご承知のとおり、石狩は江戸時代から明治初期にかけては、この地方全体の中心地であります。しかし、札幌に北海道開拓政策の拠点として、札幌本府が建設され、その後、開拓使、札幌県、北海道庁の行政都市として発展します。また、小樽は、幌内鉄道が建設されてその起点となり、さらに大規模な港湾整備が行われた結果、鉄道・港湾・商業都市として発展しました。その結果、石狩のこの地方（道央）における役割が低下しました。

そして、もう一つ、気象条件も地域の歴史を見る場合に、重要な影響を与えますが、説明は省略いたします。

2. 地域史の特性を考えるための指標

はじめに、「石狩」という地名の地理的範囲・区域についてひとつと触れておきます。単に石狩という場合には、現在の石狩市域全体、即ち旧石狩町及び厚田村（厚田郡）・浜益村（浜益郡）両村を指すことにします。問題は「石狩」には「石狩市街」、「石狩町」（明治40年花川村と合併）、「石狩郡」があり、郡には石狩町のほかに、現市域以外の篠津村（後に新篠津村になります）と当別村が含まれることです。篠津（新篠津）村と当別村は同じ石狩郡内でも純農村で、石狩町と土地柄が違います。そのことに気を付けながら話を進めたいと思います。

(1) 戸口の増加

さて、地域の歴史を考えていく場合に、地域の動きを知るうえで目安になるものは何だろうかと考えると、歴史の主体はその地域に住む人たちですので、住民の動向を知ることが重要であり、最初の手掛かりになるのが人口の変動です。

まず、明治時代の石狩郡の人口変動を見てていきます。あまり変わらなければ、地域社会に大きな変化はなかつたといえますし、大きく動いていれば、激動の時代であり、その背景に何があつたかという形で次の研究に進むわけになります。

まず、「表-1」の「戸口の増加」をご覧ください。石狩・厚田・浜益3郡の合計を見ますと、時間の関係で詳細な数字は表を見ていただくことにしますが、明治13年（1880）から大正6年（1917）までのわずか37年間で、1,248戸・4,318人から6,155戸・4,123人へ、戸数が約5倍、人口は驚くなれ約10倍になつています。

もう一つは、現在の市域、旧石狩町と厚田・浜益2郡に限定しますと、

同年間に、1,076戸・3,584人から3,627戸・24,967人へ、戸数では3・4倍、人口では7倍になります。なぜ、石狩市域と3郡全体でこういう違いがあるかというと、先ほども述べたように、石狩郡には当別と篠津・新篠津が含まれるからです。

戸数の増加傾向を石狩町に限定しますと、明治30年代が明治期のピークになります。厚田と浜益はちょっととずれて明治40年代になります。人口の面では石狩と浜益は大正期まで増加を続け、明治時代にはまだピークに達していませんが、厚田は明治の末頃にピークを迎えます。

なぜこのような戸口の激増が起つたのか。これが研究を先に進める手掛かりになります。

(2) 来住（移住）者の増加

次は、人口の激増の最大の原因は何かということになります。先

ほど、この時代の北海道は開拓の時代で人口が増えたといいましたが、この地域もやはり戸口の激増期で、明治20年（1887）代後半からその傾向が顕著になります。その原因を探るために、明治20年代の10年間に限定してこの地域の移住者の数をまとめたのが「表-2」です。

3郡の移住者総数は、1,751戸・6,510人で、この10年間の増加戸口3,417戸・13,738人と比べますと、戸数では51%、人口では47%を占めています。そうすると、増加の最大の原因是、移住者・移民の激増にあつたことがわかります。明治期は、この地域でも移住の時代だったということになります。

さて、もう少し詳しく知るために、移住者の職業を見ます。いうまでもなく、この地域は農業と漁業が2大産業ですので、3郡移住者総数に占める農・漁業戸数の割合を見てみますと、農家が60%、漁家が14%です。農家には当別村と篠津村も含まれますから、現在の石狩市域に限定すれば、漁家の比率はこれより著しく高くなります。特に、浜益村の漁業移民が多いのが目立ちます。

(3) アイヌ戸口の動向

先住民族アイヌの人口の動きを示したのが、「表-3」です。この表にはありませんが、アイヌの人口は、江戸時代後半、特に幕末期に著しく減っています。3郡の合計は明治5年（1872）には54戸、241人、大正6年（1917）に71戸・249人で、多少増加していますが、ほとんど変化がありません。地区別に見ますと、浜益村が圧倒的に多いのが地域的な特徴です。

(4) 農家の増加

次に、戸口の増加を農家について見ますと、「表-4」のとおりです。明治16・20・31・40年をピックアップしましたが、農地開拓の進展という時代背景を反映して、明治16年（1883）から40年までのわずか24年間に、3226戸に過ぎなかつた3郡農家総数は約12倍の3、808戸に増えています。明治40年の地区別内訳を見ますと、当然、当別村と新篠津村を含む石狩郡が最も多く75%、厚田と浜益は漁業主体の村ですので、それぞれ14%と11%と少ないのが大きな特徴です。農地開拓の進展については、後で「表-7」の耕地面積を見ます。

(5) 漁家の増加

次に漁家の戸数は「表-5」のとおりですが、漁業の種類別に見ますと、石狩郡は鮭漁の漁家がほとんどで、厚田・浜益郡は鰈漁業の漁家が大部分を占めています。すなわち、鮭漁の石狩、鰈漁の厚田・浜益という地域の特色が明確です。3郡の総数は、明治20年（1887）の523戸から40年の1,843戸（内専業1,373戸）へと3.5倍に増えています。明治40年に限定して、郡ごとに戸数を見ますと、浜益が1,020戸で全体の55%と圧倒的に多く、厚田は757戸、41%、石狩は鮭漁では有名ですが、漁家数では66戸で4%に過ぎません。

さらに、漁家の魚種別、漁網別の戸数を見てみると、石狩はすべて鮭と鱒の建網（定置網）と曳網の漁業者です。厚田と浜益は鰈の建

網と刺網の漁業者で、刺網の漁家は昆布漁や、地区によつてはナマコ漁などの磯廻りの漁業を行つています。鮭漁では曳網漁業者が74%を占め、厚田・浜益の鰈漁では、刺網漁業者が80%を占めています。ここで注目しておきたいのは、鰈漁というと一般に、規模の大きな建網、当時の建網は角網ですが、大規模な番屋を拠点とした親方の經營する建網漁業が注目され、それは重要ではありますが、漁家の数からいうと圧倒的に多かつたのは零細な刺網漁家だということです。

漁家を農家と比較してみると、後で触れる通り、明治30年前後までは鰈漁業が著しく発達した時期で、農地開拓が本格化するのはその後ですので、漁家戸数の方が当然多いわけです。漁業は江戸時代から盛んで、特に幕末から急激に伸びていきました。ところが明治の後半から、漁家よりも農家の移住が増えまして、明治40年頃になると、農家の戸数は漁家の戸数の2倍くらいに増えています。

これまで、戸口の面から、現在の石狩市域の明治時代の特徴を見てまいりました。まとめますと、明治は人口の激増期であり、その主要な要因は移民であること、産業は石狩町が鮭漁中心であり、厚田・浜益は鰈漁が主体だったということです。以上で、時代のおおよその輪郭がつかめきました。後でもう少し詳しく見ることにします。

3. 近世から近代への移行・転換（幕末・明治前期）

(1) 幕末・場所請負制の変質・崩壊

① 幕府（箱館奉行）の石狩改革

続いて、この地方が、江戸時代から明治時代、近代へどのように変わつていったかということを具体的に見てみたいと思います。

まず、近代、明治時代を知るためには、幕末、江戸時代の終わりから見ていかなくてはなりません。安政2年（1855）に、幕府は松前藩から松前・江差地方を除く蝦夷地、松前地を取り上げて、直轄地とし、この石狩地方でも経営の改革を行いました。この石狩改革につ

いては、北海道史研究者の君尹彦先生がこの郷土研究会で、2度にわたり、「石狩の近代化はどのように進められたか」という題で詳しく話され、その内容は『いしかり曆』の第12・13号に掲載されていますので、ご覧いただきたいと思います。

かいつまんで言いますと、幕府は蝦夷地經營のために、箱館奉行を置きます。明治初期の開拓使に相当する出先機関です。そして、石狩に勤番所を設け、それまで続いてきた場所請負制を廃止して直営方式に変えていきます。また、札幌周辺に御手作場と呼ばれる直営の開墾場を設け、保護移民を入植させて農地開拓を進めます。これが、明治初期、開拓使の移民政策の先駆的な形態です。

次に、幕末期の重要な社会の変化は、厚田・浜益も含めこの地方への出稼ぎの漁民が急激に増え始める 것입니다。石狩では市街地の原形が形成されつつありました。一方で、先ほど言いましたように、アイヌの人口が減少していました。

② 庄内藩のハママシケ経営

北の浜益を見ますと、幕府の命令で、庄内藩が浜益（ハママシケ）を拠点にして天塩地方の警備と開拓を進めます。それまでと違つて、本州の藩が、直接蝦夷地の開拓を試みる。慣れない北の蝦夷地で、一体どのように開拓を試み、何が成功して何が失敗したのか、それが明治以降の開拓使の政策や開拓にどんな影響を与えるのかが、私の関心事ですが、そのことについては、平成24・25年に市民図書館の講座でお話しましたので、省略いたします。

③ 厚田場所の動向 ④ 山道の開削

幕末には蝦夷地の各地で道路の開削が行われましたが、この地方では、浜益から雄冬を越えて増毛に通ずる雄冬山道・増毛山道（両方の呼び名があります）と、厚田の濃昏山道の開発が行われています。北

海道道路史上、重要な事業でした。

(2) 開拓使・札幌県・道府時代の地方制度

① 郡と町村の成立

これから、いよいよ明治に入ります。

幕末の蝦夷地を見ますと、各地に場所請負人の場所經營の拠点となつた運上屋があり、運上屋の漁場には番屋が置かれ、それらの近くには弁天社や稻荷社などの神社などがあり、早いところではお寺もでき始めます。アイヌの集落（コタン）も大きなものは運上屋の近くにありました。また、道南の和人地や東北の津軽・南部方面からの出稼ぎ漁民の小さな集落が海岸にポツンポツンと点在するようになります。

ところが、明治2年（1868）に蝦夷地が北海道となり、開拓使が置かれ明治政府の支配が及ぶと、この地方は石狩郡の石狩郡、厚田郡、浜益郡となり、その後、その下に行政的な村や町ができ、集落や市街地が発達します。

開拓使は置かれましたが、明治2年から4年までは、開拓使が全道一円を支配したかというと、そうではありません。新政府の財政力は弱く、開拓使の力だけではこの広い北海道を經營することは困難でした。それで、省や本州の諸藩、有力なお寺や戊辰戦争で負けた東北地方の士族たちに、全道各地を分割して、支配をさせました。

この地方はどうかといいますと、石狩郡は、2年に兵部省の管轄になりました。3年に兵部省から開拓使に移管されました。石狩に出張所が置かれ、石狩がこの地域全体の中心地でした。厚田郡は開拓使の直轄地、浜益郡は東京の増上寺の管轄地でした。

明治4年に函館から札幌に開拓使の本庁が移り、ようやく開拓使が全道を統括するようになります。さらに、明治12年には、道内各地に郡役所が置かれることになり、明治15年に開拓使から札幌県、道南は函館県、道東は根室県となり、それも19年の初めに終わって、北海道

府が設置されます。これが戦後の「地方自治法」による北海道（今まで一般的に道庁といいます）まで続きます。ついでに言いますと、

今の北海道と戦前の北海道の最大の違いは、戦前の北海道は、二つの性格を持つていました。一つは国の開発行政を担当する出先機関、もう一つは本州の県に相当する地方自治体です。

次に、この地域に初期に成立した行政的な村を見てみます。最初に村ができるのは明治4年です。石狩郡は早くから開けていましたので、村ができるのですが、道内のほとんどは、まだ人口がほとんどありませんから、村の成立はまだ限られた地域だけでした。石狩国では明治7年に大小区画制度が実施されましたが、全道的にこの制度が行われたのは、明治9年です。

さて、その明治9年の石狩・厚田・浜益3郡の大・小区と町村は次のとおりですが、当時の地名については、こちらの研究会の顧問の田中實氏が、「いしかり曆」第4号に「石狩町の大字、字（町）について」と題して書いておられますので、参考にしてください。

石狩・厚田・浜益3郡は第二大大区に属し、石狩郡の本町・辨天町・新町・浜町・横町・仲町・船場町・親船町・花畔村が一小區、若生町・八幡町・生振村が二小區、内陸の當別村が三小區です。この後、14年に篠津村、15年に樽川村ができます。

当時、「町」を、チョウと呼んだかマチと呼んだかは、厳密にいうとわかりません。北海道の自治体名の多くは、後にはチョウと呼んでいます。振りカナは開拓使が編集した「北海道志卷一」のままです。厚田郡の聚富・望來・嶺泊・古丹・押琴・小谷・別狩・厚田・安瀬・濃畫はいずれも村で、四小區です。

別・雄冬の各村が六小區です。明治15年に、清水と柏木が合併して柏木になり、郡別と雄冬が合併して郡別村になります。

さらに、明治12年にはこの大小区画制が郡区町村制に変わり、先ほ

ど述べた郡役所と戸長役場が置かれることになります。

② 二級町村制と町村の確立

そして、明治35年頃にほぼ町村が確立します。北海道にも明治33年に一級町村制、35年に二級町村制が施行されて、35年に二級町村の石狩町が成立しました。当時、町の数は限られていて、ほとんどは村ですので、石狩が町となつたのは、石狩が当時、人口が増加し、財政力

もあつて、栄えていたという証拠にもなります。

明治35年の二級町村制の下では、石狩郡には石狩町のほかに花川村と當別村、新篠津村があり、石狩町の中に、本町・辨天町・新町・濱町・横町・仲町・船場町・親船町・若生町・八幡町・生振村の大字が置かれ、花川村には花畔村と樽川村の大字があります。このように、明治初期の町村の名は、大字という形で残しています。それまでの花畔と樽川も大字という形で残されました。それから、新篠津村は明治29年に篠津村から分かれています。

次に、厚田郡を見ますと、厚田村と望來村の2村があり、厚田村の中に大字として厚田・古潭・押琴・小谷・別狩・安瀬・濃畫の7村、望來村の大字は、望來・聚富・嶺泊の3村という状況でした。

そして浜益郡には、濱益村と黄金村の二つの村があり、後に両村は合併するわけですが、浜益村には、茂生・群別・雄冬3村の大字、黄金村には、川下・尻苗・柏木・實田4村の大字があります。

ほぼこのような過程で、江戸時代の運上屋、アイヌ・コタン、出稼ぎ漁民の小屋などがあつた地域に、明治になつて行政区域としての町や村が成立した訳であります。

(3) 開拓使・札幌県時代の開拓政策と石狩

① 保護移民と開拓

次に、開拓使・札幌県時代の開拓政策とこの地方の歴史とのかかわりについて触れておきたいと思います。

ひとつは移民と開拓です。開拓使は、急いで北海道を開拓するため

には、本州から開拓者を移す必要がありました。ところが、國、開拓使が呼びかけても、明治の初めは、本州の社会は、まだ、江戸時代とあまり変わっていないわけです。それまで農民は土地に縛られ、自給自足を基本とした経済でした。明治政府が行つた身分制度、農地制度、税制、金融・財政などの改革により、本州の農村が大きく変わり、多数の開拓者が北海道に渡るようになるのは明治20年（1887）代からです。それでも無理に北海道に移そうとすれば、旅費、小屋掛け料、開墾料を出したり、食料や農具、家具などを支給したりしなければ、明治の初期は、本州から移民が来ない時代でした。

そのようなわけで、開拓使の保護を受けた人たち、保護移民や屯田兵がこの地方にも来たわけです。また、一般的の開拓移民とは直接関係はないのですが、樺太アイヌの人たちを強制的に札幌郡の対雁に移しています。

まず、開拓使の保護移民をあげますと、石狩郡で代表的なのは、明治4年（1871）に岩手から花畔に、宮城県から生振に入った団体です。それから、全道的に有名なのは、仙台藩士の開拓団です。仙台藩は明治維新の時に幕府側に付き、戊辰戦争で敗れて処分を受けたため、藩士たちが土地をなくし、職を失つて、一部の人たちが、領主と一緒に北海道に新しい土地を求めて移住してくるわけです。その一つが仙台藩岩出山の領主伊達邦直に率いられた旧家臣たちです。藩内各明治政府の身分制度の改革で、家臣の家臣は士族の身分でなくなり、移住先の北海道でも大問題になるのですが、説明は省きます。さて、伊達邦直主従は、明治4年、厚田郡の聚落に入るのですが、そこは農地には向いてないということで、翌年、石狩郡当別に再移住しました。札幌県時代になると、石狩郡には佐賀や福岡の団体が当別村に、山口の団体が樽川に移住し、厚田郡の望來や発足にも山口団体が入植しま

した。

② 篠津屯田兵村（石狩郡篠津村）

次に、屯田兵では、明治14年（1881）に現在の石狩市域ではありませんが、石狩郡の篠津に屯田兵村が置かれます。明治8年、札幌の琴似村に最初の屯田兵が移住し、明治32年までに、道内各地に37兵村が設けられ、明治37年に屯田兵制度が廃止されました。これらの兵村の中で、篠津兵村には他とは少し違う特色がみられます。一つは、開拓使は寒地に適した住宅を作ろうと各地で洋風建築の導入を試みましたが、篠津ではロシア式の丸太組兵屋を建てました。もう一つは、開拓使の養蚕奨励策として、篠津兵村に養蚕室を設置しています。

③ 開拓使の石狩鮭罐詰製造所

開拓使は、新しい産業振興政策の一環として、外国、特にアメリカから多くの技術者を雇つて官営工場を設置しましたが、石狩では鮭・鱈の罐詰工場を経営しました。道庁時代初期に民間に払い下げられましたが、野付郡別海村（現別海町）の別海罐詰所と共に当時の代表的な鮭鱈罐詰製造所でした。

④ 樺太アイヌの移住と漁場経営

先ほども触れたように、明治8年（1875）、開拓使は樺太アイヌを宗谷に移住させました。アイヌの人たちは宗谷に住みたいと言つていたのですが、翌年、強制的に対雁に移しました。ところが、対雁での生活に慣れず、皆さんご承知の通り、こちら、八幡町来札に鮭の漁場、厚田村に鰯の漁場を与えて何とか生活を安定させようとするのですが、コレラや天然痘の流行により多数の犠牲者が出来ました。明治18年に来札に転住しましたが、日露戦争後、南樺太が日本の領土になるとアイヌの人たちは故郷に引きあげ、ごく一部の人しか残らなかつたのです。

4・北海道庁の政策と石狩

(1) 殖民地（原野）撰定と区画測設

次に、北海道庁の政策とこの地方との関係について述べたいと思います。道庁時代になると、府県からの移民によって人口が急激に増えたことは、既に述べましたが、その前提として、大量に北海道に移民を入れるために、北海道にどのような原野、開拓適地があるかを事前に詳しく調査し、測量、区画して地図を作り、大量に国有未開地を処分するための基礎的事業に力を入れます。最初の10年くらいはその事業に集中します。

この地方で最初に行われたのは、明治20年（1887）の石狩郡上當別・下當別・生振原野の調査（殖民地撰定）です。道庁が殖民地撰定事業に着手したのは明治19年ですので、20年というと、全道的にも早いですね。

この地方の殖民地区画測設事業は、明治25年の石狩原野が最初で、26年には生振・花畔・當別・篠津原野で実施され、この後は、石狩郡でも上流の当別村域になります。

厚田郡では、ハツタリ・望来殖民地の区画が明治41年です。

(2) 主な団体（団結）移民

道庁の移民政策とし注目されるのが、団体（団結・集団）移民の奨励です。個々バラバラに、単独で未開地に入り開拓するのは大変なので、総代人を中心団体を組織して北海移住する場合には、いろいろな特典を与えました。まず、規約を作り、事業計画を立てます。例えば3年計画とか5年計画で、初年度には何戸、次年度には何戸、3年度には何戸、合計何戸に入る計画書を道庁に出し、それが許可されると、総戸数分をまとめて未開原野の区画地の一ヵ所に貸下地を設定します。これが「貸付地予定存置」制度です。そして、団体で入植したところに、技術の指導とか、いろいろな便宜を与えるわけです。こうして、明治の後半から団体移住が増えています。

この地方の代表的な団体は、石狩郡では、明治27年（1894）から翌年にかけて生振に入った愛知団体、27年から29年にかけて石川県から花畔に入った石川団体があります。厚田郡では、明治27年と翌年に望来村に移った石川団体、28年聚富村に移った兵庫団体、同年望来村高岡に入った山口団体などがあります。

各地に入植したこの団体移民は、移民の総数の中からいうと、戸数ではそれほど多くはありませんが、北海道の各市町村の歴史上、とても重要な役割を果たしています。なぜかといふと、一地方からまとまって入りますので、結束力が強く、単独移民の開拓地と比較して成功、定着率が高く、本州、出身地の風俗習慣をよくその地域に残しているからです。

(3) 市街地の発達

開拓の進展とともに、石狩市街地も急激に発達し、極めて重要な役割を果たすことになりますが、このことについては、平成26年に石狩市民図書館の講座でお話しました。時間の関係もありますので省略します。厚田村には望来・厚田・古潭に、浜益村には茂生にも市街が成立しました。

5・産業・交通運輸の発達

(1) 漁業—石狩の鮭と厚田・浜益の鰈—

産業については、時間の関係で、漁業と農業に絞つてお話をしたいと思います。

まず、「表-6」の1をご覧ください。これは石狩、厚田、浜益3郡の、鰈の漁獲高・生産高、量と価格の両方をまとめたものです。調査時間が足りず空欄があり、統計の写し違いもあるかもしれません、それぞれ、出典を挙げておきましたので、参考にしてください。

① 鯉の漁獲高と鰈搾（締・メ）粕の生産高

戸口の面では、既に石狩の鮭漁と厚田・浜益の鰈漁という地域的特

色がはつきりして いましたが、ここでは、最も重要な漁獲高から見て みます。

初めに、漁獲高の単位の「石」について触れておきます。石の重量 は生鰯と粕とでは違います。なぜかというと、鰯は粕（魚肥）に加工 すると、5分の1くらいの重さに減りますので、粕の5倍になると生 鰯の実際の重さになります。昔は、統計上は生鰯の生産量は貫を用い ず、すべて石で表しました。開拓使も札幌県もそうで、道庁や漁業組 合の古い記録もそうです。後になると貫に変わり、さらに、メートル法の kg・t（トン）になります。それで、1石は、お米と同じで 150 kg ですので、締（メ）粕だと1石150 kgですが、生鰯に換算 すると、その5倍の750 kgになります。0.75トンが1石です。

さて、北海道の鰯の漁場はご承知のように道南から次第に北上し、 明治30年（1897）頃になると、この地方から留萌・宗谷地方が主 生産地になり、最盛期を迎えます。

この地方の漁場は、道庁の統計上は厚田郡と浜益郡だけで石狩郡は ありません。両郡の漁獲高は、その年により豊漁・不漁の差が著しく 一定していませんが、明治20年代まではほぼ毎年、それぞれ2万石か ら3万石で、明治20年代後半から30年代に最盛期を迎えます。漁獲 高は、厚田は明治32年が最高で62,400石、浜益は34年に最高の 54,900石を記録しました。ただし、価額では、厚田は漁獲量と おなじ明治32年の約61万円、浜益は38年の約70万円が最高額です。な お、全道の最多漁獲高は、明治30年に約125万石（94万トン）を記 録しました。

当時は今と違つて、獲れた鰯の大部分は肥料、メ粕に加工して本州 に移出され、日本農業の発展に貢献しました。その割合は、だいたい 90～95%ほどです。

厚田・浜益両郡のメ粕の生産量は、明治20年代まではそれぞれ年産 1万～2万石でしたが、20年代末から30年代にかけて最盛期を出現

し、厚田は漁獲高と同じく明治32年に54,600石・544,000円を記録し、浜益も同じく34年に45,000石、価額は38年に 634,500円に達しました。

なお、北海道全体の統計で、食用の鰯が肥料を上回るのは、昭和の 初めになつてからです。

② 鮭の漁獲高と塩鮭の生産高

鮭は〔表-6〕の2をご覧ください。鮭漁の動向は鰯漁と少し違います。鰯は明治30年前後にピークを迎えるが、鮭はそれより10年以上も前に最盛期が過ぎています。先ほど言いましたように、鮭漁には、建網（定置網）と曳網がありますが、厚田と浜益は極めて少なく、漁場はほとんど石狩に限られます。

明治初期から10年（1877）代の3郡の鮭漁獲高は詳細は不明ですが、石狩郡の漁獲高及び3郡の塩鮭の生産量から推定すると、2万石前後でした。鮭の1石は鰯とちがつて、60尾を1石といいます。鱈はその2倍の120尾です。鱈は価値が低いからだと思います。

石狩郡の漁獲高は、明治10年代までは、1万5千石から2万石で、明治15年には約24,600石・159,000円を記録しました。ところが、明治20年の23,000石・134,000円、3郡合計では約29,000石・174,400円をピークとして不漁期に入り、1万石以下の年がほとんどになります。30年代になるとさらに減つて、わずか5千石以下に減ります。ただ、不漁になると、値上がりしましたので、漁獲価格のピーカは、明治38年の約161,500円、3郡合計では177,000円です。

鰯は粕に加工しましたが、鮭の約80%は塩鮭にしていました。地元 などでは、生鮭のさまざまな利用の仕方があります。当時は、今と 輸送・流通機構が違いますのでほとんど塩鮭です。江戸時代の後半か らそうでした。塩鮭の生産量も、当然のことながら、鮭の漁獲高に応じて変化し、明治初期から10年代には、ほぼ年産1万から2万石で推

移し、明治12年には最多の22,400石、3郡合計215,000石を記録しました。しかし、明治16年以降は1万石以下に減少し、明治30年代になると、さらに減つて5千石以下、37年にはついに千石以下となりました。

塩鮭の生産価額は、豊漁期の明治12年には石狩郡だけで約19万円にも達していました。不漁期には生産量は減りましたが、価格が高騰した結果、31年には約10万円でした。しかし、その後は不漁に伴い、明治40年には約1万円にまで落ち込みました。

(2) 耕地の増加と農業

① 耕地の増加

最後に、農業に触れたいと思います。まず、農業発展の指標の一つは、耕地面積の変化です。農家が明治の中頃から急激に増えたことは、先ほど触れましたが、耕地面積はどうでしょうか。「表-7」をご覧ください。明治16年（1883）の3郡の田畠、耕地面積は、わずか約400町歩に過ぎませんが、40年には17,000町歩に増え、この短期間に40倍以上に急増しています。耕地面積の増加は、当然農業の発達を示しています。郡別にいいますと、厚田と浜益は漁業が主体、もちろん原野もありますが、他の地域と比べて原野はそれほど広くないですから、石狩郡に集中します。石狩も現在の市域の農地はそれほど多くはありませんが、純農村の当別村と新篠津村が含まれますので、郡別では石狩郡が圧倒的で80%を占めます。

次に、耕地面積を田畠別に見ますと、明治40年になつても、畠が94%を占めます。この頃には、石狩地方（当時の札幌支庁管内、5郡）全体を見ますと、稻作がかなり伸びつつありましたが、まだ、畑作が主体です。

② 主な農作物

〔表-8〕は開拓期を脱しつつあつた明治38年（1905）の主要な農作物です。作付面積が最も多いのが麦の3,050町歩、2番目

が燕麦で2,450町歩です。燕麦は馬の飼料です。燕麦がなぜ多いかといいますと、若い方は想像がつかないと想いますが、北海道は全国で最も早く農業に馬が取り入れられた地域です。そのスタートは開拓使が農業の近代化を図るために、手作業の農業から機械を取り入れた洋式農業を導入したことに始まります。道府時代の初期、明治20年代になりますと、北海道の農家の標準的経営面積が1戸当たり、約5ヘクタール、5町歩とされます。本州では自作地が1町歩ですと立派な農家ですが、北海道で農業をやっていくためには、本州の5倍もの耕地面積が必要です。人手だけではできないので、作業能率を高めるために機械を導入しなければならず、機械は今と違つて畜力農機具を使いますので、馬を飼います。開拓期の数年間は馬を持たせんが、どの農家も、本州では馬を持てないような小作農家でも、1頭や2頭の馬を持つようになります。その農耕馬の飼料が燕麦です。そのほかに軍馬の飼料としても重要でした。

燕麦の話が少し長くなりましたが、次の第3位が菜種の1,500町歩で、これは菜種油、食用油の原料です。それから、小豆（あずき、しようず）、大豆、米（稻）の順で上位を占めます。

生産（収穫）金額でも、麦の152,000円が最も多く、以下、菜種、燕麦、小豆、米、大豆が上位を占めています。

このように、明治期のこの地方では、農地が急激に増加し、農業が発達しましたが、稻作は伸びつたとはいえ、まだ、畑作が主流でした。この後、大正時代から急激に水田が増えていきます。

明治時代の北海道農業の特色の一つとして、華族といわれた人々が經營する農場を含め大農場が多いことがあげられ、中には1,000町歩以上に及ぶものも少なくありませんが、この地方にはさほど大きな農場はありません。また、牧場が開かれ、酪農も行われるようになりますが、大規模なものは見られないようです。

(3) 石狩油田の開発

初めに述べましたように、この地方では、北海道では数少ない油田の開発が行われましたが、時間の関係で省略させていただきます。

(4) 交通・運輸の発達

それから、交通運輸の面では、石狩川の水運や、全国的にも有名な石狩川の渡船場があります。さらに、運河は花畔・銭函運河が開削され、軌道もありますが、省略いたします。なお、石狩川渡船場の歴史については、ご承知の通り、『いしかり曆』第9号で特集していますので、皆さんのが詳しいと思います。

6. 教育・文化

教育・文化については、時間の関係で、社寺に限つて少しだけ触れます。神社はその地域の歴史と非常に関係が深いですね。現在残っている神社で、江戸時代に創建された神社のほとんどは、場所請負人が創建した神社です。石狩の場合は村山家が建てた石狩弁天社です。それ以降も、石狩の場合鮭漁が発達すると、力のある親方衆が神社の経営を財政的に支えます。そういう土地柄が神社の歴史にも反映しています。また、石狩八幡神社の創建は、初めに述べた幕府（箱館奉行）の石狩改革と関係があります。

お寺は宗派ごとにできますから、神社とは少し違いますが、それでも、古いお寺の歴史を知ると、創建期から発展期まで、地域の経済界の実力者たちが、お寺も支えている。お寺から見た地域の歴史が成り立つくらい、お寺や神社は大事ですね。

文学については、私は専門ではありませんが、石狩尚古社は、北海道文学史の中でも特色ある位置を占めています。尚古社については、『いしかり曆』第11号でも特集されていますので、省略させていただきたいと思います。

終わりに

以上、わたくしの見た明治期の石狩地方の特色についてお話をさせていただきました。調査不足と時間の制約から舌足らずで、省略させていただいたことも少なくありませんが、この辺で私の話を終わらせていただきます。どうもご清聴ありがとうございました。



石狩市郷土研究会創立 60 周年記念講演会
日時 平成 2 年 10 月 25 日 (日)
会場 石狩市花川北コミュニティセンター

【別紙】

〔表-1〕 戸口の増加

年次	石狩郡				厚田郡		浜益郡		3郡合計	
	郡合計		石狩(町)		現住戸数	現住人	現住戸数	現住人	現住戸数	現住人
	現住戸数	現住人	現住戸数	現住人	現住戸数	現住人	現住戸数	現住人	現住戸数	現住人
明治13	628	2,156	456	1,422	194	962	426	1,200	1,248	4,318
16	670	2,617	—	—	220	1,364	322	944	1,212	4,925
20	1,127	4,094	883	2,845	485	2,006	390	3,325	2,002	9,425
30	3,747	14,031	1,770	6,911	836	4,836	836	4,296	5,419	23,163
40	3,509	20,973	1,567	9,077	1,117	7,778	1,378	7,000	6,004	35,751
大正6	3,936	27,022	1,408	10,466	1,061	6,896	1,158	7,605	6,155	41,523

〔出典〕「開拓使札幌本庁管内村別戸口表」(明治13.1.1)、「札幌県統計書」(明治16.11)、

北海道府「北海道戸口表」(明治20・30・40・大正6、各年12.31)

〔註〕各年12月31日現在

〔表-2〕明治20～29年 来住農・漁業者

	石狩郡	厚田郡	浜益郡	3郡合計
農業	戸数 845	157	48	1,050
人口 3,532	611	191	4,334	
漁業	戸数 30	41	172	243
人口 96	128	670	894	
総数	戸数 1,049	342	360	1,751
	人口 4,056	1,174	1,280	6,510

〔註〕明治24年までは転籍者のみ、同25年以降は寄留者を含む。

〔出典〕「北海道府第十回勧業年報」、「明治二十九年北海道来住往住戸口表」

〔表-3〕アイヌ戸口

	石狩郡		厚田郡		浜益郡		3郡合計	
	戸数	人口	戸数	人口	戸数	人口	戸数	人口
明治5	12戸	52人	6戸	19人	36戸	170人	54戸	241人
15	18	58	5	10	43	157	66	225
20	16	23	5	6	42	159	63	188
30	13	53	4	4	37	151	54	208
40	9	32	3	3	44	169	56	204
大正6	12	39	3	3	56	207	71	249

〔出典〕開拓使「北海道志 卷一」、「北海道府統計書」(第2・10・19・29回)

〔表-4〕農家（耕作者）の増加

		石狩郡		厚田郡		浜益郡		3郡合計	
明治16	専業	244戸	人	14戸	人	45戸	人	303戸	人
	兼業	19		-		4		21	
	合計	263		14		49		326	
20	自作	383	1,323	79	192	30	99	492	1,614
	小作	12	25	2	4	3	8	17	37
	合計	395	1,348	81	196	33	107	509	1,651
31	合計		7,536		996		895		9,427
40	合計	2,840	15,410	550	2,478	418	2,299	3,808	20,187

〔出典〕「明治十六年札幌県統計書」、「北海道庁統計書」(第2・10・19回)

〔表-5〕漁家（漁業者）の増加

	石狩郡		厚田郡		浜益郡		3郡合計	
明治16	24戸	72人	174戸	1,418人	192戸	1,087人	309戸	2,577人
20	14	14	178	454	331	2,093	523	2,561
40	主業	41	182	385	1,733	947	5,809	1,373
	兼業	25	113	372	1,485	73	336	470
	合計	66	295	757	3,218	1,020	6,145	1,843
	建 網	鰯	-戸	45		36		81
		鮭	4	5		3		12
		鱈	1	2		-		3
	曳 網	鮭	33	2		-		35
		鱈	15	2		-		17
	刺網	鰯	-	213		112		325
	昆布		-	394		626		1,020

〔出典〕「明治十六年札幌県統計書」、「北海道庁統計書」(第2・10・19回)

〔表-6〕石狩・厚田・浜益3郡の鰈・鮭漁獲・生産高

1. 鰈

	漁 獲 高					鰈 摳(絞) 紼 生 産 高				
	厚 田 郡		浜 益 郡		全 道	厚 田 郡		浜 益 郡		全 道
	漁獲高	価額	漁獲高	価額	漁獲高	生産高	価額	生産高	価額	生産高
明治	石	円	石	円	石	石	円	石	円	石
3					23,934					
4					277,584	11,655	—		141,425	584,087
5					392,054	3,150	8,705		214,994	599,835
6					374,490	5,900	7,100		177,094	575,559
7					526,042	7,967	10,332		247,464	1,288,514
8					492,997	8,202	12,468		226,789	944,469
9					760,866	9,008	12,035		38,698	1,211,370
10					719,957	10,609	15,133		338,545	1,297,984
11					610,811	6,565	11,243		218,603	993,983
12					764,244	12,524	12,543		322,290	2,085,219
13					911,841	17,029	138,609	15,804	129,594	347,612
14					872,067	13,977	16,244		323,688	2,013,344
15					983,486	14,266	74,180	11,957	64,865	
16	17,507		20,692		734,677	14,184		19,903		
17					951,727	17,310	65,701	19,299	68,320	
18					886,271	24,082	72,247	19,404	60,965	
19					900,028				572,374	2,079,328
20	23,988	153,838	22,625	135,339	666,090				384,018	2,181,448
21	26,466	131,686	28,369	146,658	902,809				558,775	2,784,969
22	27,688	146,895	35,824	211,334	842,943				510,642	2,929,959
23	32,156	177,751	36,330	233,931	947,638	31,126		34,698	599,794	3,692,812
24	38,053	202,977	25,000	155,525	1,076,114				663,567	3,891,301
25	14,067	91,225	10,993	70,178	794,835	12,144		9,550	484,770	3,092,104
26	22,168	135,054	22,396	141,391	927,238	19,428		21,000	134,400	605,134
27	18,542	122,133	20,622	133,619	1,046,479	16,675	121,771	19,950	129,675	738,873
28	34,787	226,527	24,508	164,185	994,353		111,722			664,066
29					976,558	31,715	285,435	35,800	322,200	628,925
30					1,254,075	33,856	264,077	38,000	361,000	808,221
31	21,183	212,193	19,130	187,754	837,263	18,353	192,707	18,200	179,270	521,089
32	62,422	609,543	31,975	341,852	930,560	54,559	543,790	29,907	322,996	606,626
33	25,644	259,303	32,746	349,380	789,778	23,218	233,967	30,795	330,122	506,368
34	40,340	412,979	54,880	555,545	869,877	31,100	326,550	44,950	449,500	560,394
35					938,805	17,800	186,900	32,000	352,000	533,719
36	46,910	438,618	26,672	278,394	1,013,938	36,420	364,200	25,750	252,350	621,794
37	33,117	407,636	47,545	604,528	754,701	23,843	309,959	41,880	544,440	471,980
38	40,053	576,168	47,752	699,102	664,295	27,513	412,695	42,300	634,500	438,538
39					522,753	7,500	105,000	2,115	26,437	307,463
40						10,941	169,588	13,628	204,420	328,410

2. 鮭

	漁獲高								塩鮭生産高				
	石狩郡		厚田郡		浜益郡		全道		石狩郡		厚田郡	浜益郡	全道
	漁獲高	価額	漁獲高	価額	漁獲高	価額	漁獲高	生産高	価額	生産高	生産高	生産高	生産高
明治	石	円	石	円	石	円	石	石		石	石	石	石
3	17,211						18,903						
4	15,058						29,827	10,463		1,064	—	13,605	
5	24,216	116,235					61,328	18,724		1,168	675	43,059	
6	17,276						51,568	17,275		1,524	691	32,697	
7	10,479						36,507	570		789	793	15,071	
8	15,165						50,217	15,757		1,352	990	33,057	
9	14,019						59,110	14,419		1,104	1,298	31,201	
10	12,137	85,563					62,610	12,136		1,278	2,480	35,160	
11	15,955						69,511	15,951		759	774	42,123	
12	22,387						107,900	22,383	190,789	2,231	1,355	51,851	
13	19,354						123,337	19,353		1,905	825	51,998	
14	14,425						90,658	14,401		1,079	809	40,095	
15	24,654	159,019					106,844						
16	17,755		1,031			3,676	106,266	16,669		704	2,003		
17							84,558	9,684	64,884	1,121	945		
18							99,318	8,405	34,965	795	1,027		
19							117,050					110,739	
20	23,095	134,090	3,814	24,723	2,340	15,604	122,994					99,704	
21	13,232	123,113	1,543	12,938	1,497	9,546	119,884					106,364	
22	11,660	93,033	1,017	8,826	497	4,252	173,164					156,892	
23	8,633	64,215	943	7,782	610	5,095	94,797	5,750		943	550	85,408	
24	8,456	74,804	973	8,276	865	7,550	83,642						
25	9,762	88,389	1,583	15,393	543	4,856	107,990	7,400		1,472	488	98,284	
26	1,800	15,120	930	9,220	28	238	118,106	?	?	854	?	108,670	
27	2,456	22,091	573	8,881	313	2,573	59,063	1,250	10,512	571	300	35,013	
28	3,478	43,446	603	7,373	121	2,085	48,422						
29							52,708	2,540	33,020	838	250	32,118	
30		79,486					70,262	3,000	51,000	532	200	59,405	
31	8,837	152,639	2,702	54,983	122	2,948	64,444	5,896	100,232	1,235	120	53,912	
32	4,367	99,569	984	29,524	92	2,293	39,195	1,598	34,548	—	90	30,355	
33	5,253	121,929	300	6,000	309	6,460	47,058	2,007	41,746	—	301	38,149	
34	3,562	97,963	780	23,700	215	6,170	34,631	1,241	31,025	600	180	26,269	
35							32,716	1,079	23,182	600	303	21,659	
36	4,618	109,119	586	11,001	510	9,536	41,213	1,277	27,072	250	472	31,218	
37	1,782	48,294	230	5,500	312	7,281	32,960	626	14,398	130	1,175	25,357	
38	6,420	161,478	309	7,920	294	7,652	39,268	707	18,382	130	255	31,371	
39							38,085	657	17,739	230	100	31,158	
40								467	10,508	47	79	29,701	

- [出典] ○明治3～28年全道漁獲高：『北海道庁統計総覧』M29、『北海道庁第十回勧業年報』M29
 ○同29・39年全道漁獲高：『北海道拓殖の進歩』M41
 ○同4～14年鰈搾粕・塩鮭生産高：『開拓使事業報告 第參編 物産』M18、『開拓使事業報告原稿 物産部（水産表）』（道立文書館・簿書）
 ○同3～15年石狩郡鮭漁獲高：森山友太郎文書（田中實・前田薰徳編著『石狩漁業協同組合史』H14）
 ○同5・10・15・30年石狩郡鮭漁獲量額：北海道庁『北海道殖民状況報文 石狩国』M33
 (S62, 北海道出版企画センター)
 ○同12年石狩郡塩鮭生産量額、13年厚田・浜益郡鰈搾粕生産量額：開拓使勧業課『明治十三・十四年 諸物産表』（道立文書館・簿書）
 ○同15～18年各郡漁獲・生産高：『明治十五年〔札幌〕県治類典 管内物産表』（道立文書館・簿書）、
 『明治十六年 札幌県統計書』、『札幌県勧業年報』（第2～4回）
 ○同19～40年：『北海道庁統計書』（第1～19回）、『北海道庁勧業年報』（第1～10・15～19回）、
 『北海道庁拓殖年報』（第11～14回）

[註] ○全道には南千島（国後・択捉島）を含む。
 ○生鰈（ツブ鰈）200尾 = 1丸、3丸 = 600尾 = 1石、鰈×粕40貫（150kg）= 1石 [生鰈換算 ÷ 200貫 = 750kg]
 ○生・塩鮭1石 = 60尾（20尾 = 1束、3束 = 1石）

[表-7] 耕地面積の増加

	石 狩 郡			厚 田 郡			浜 益 郡		
	田	畠	合 計	田	畠	合 計	田	畠	合 計
明治16	-町歩	342.0町歩	342.0町歩	-町歩	16.6町歩	16.6町歩	0.4町歩	47.4町歩	47.8町歩
20	-	636.5	636.5	-	221.8	221.8	-	86.4	86.4
30	178.2	4,873.6	4,873.6	8.1	645.5	653.6	3.1	121.1	124.2
40	767.3	12,776.4	13,543.7	116.4	2,276.2	2,392.6	163.6	1,019.0	1,182.6

(出典) 『明治十六年札幌県統計書』、『北海道庁統計書』（第2・10・19回）

[表-8] 主要農作物（明治38年）

農作物	石 狹 郡			厚 田 郡			浜 益 郡		
	作付面積	収穫高	価額	作付面積	収穫高	価額	作付面積	収穫高	価額
米	745.6町	5,699石	79,835円	112.5町	1,008石	14,130円	110.8町	1,033石	14,462円
麦	2,777.6	22,181	132,886	150.4	1,525	10,660	122.0	1,255	8,308
燕麦	2,338.7	58,467	116,935	98.1	1,962	3,925	8.0	224	2,800
蕎麦	477.8	5,734	34,404	24.0	260	1,060	51.2	256	1,024
大豆	975.6	9,905	63,240	80.0	650	4,570	151.0	1,528	11,002
小豆	1,294.1	11,647	104,823	45.0	420	3,930	112.0	1,232	10,472
菜種	1,319.5	13,195	118,755	95.0	950	9,500	78.2	782	6,647

(出典) 『第拾九回 北海道庁勧業年報（明治三十八年）』

石狩市郷土研究会創立60周年記念講演会講師 関秀志先生 のご経歴

1. 略歴

昭和11年 北海道苫前郡苫前町に生まれる
34年 北海道大学文学部史学科（国史）卒業 北海道羽幌高等学校教諭
44年 北海道総務部百年記念施設建設事務所研究職員
46年～北海道開拓記念館研究職員・資料調査課長・資料管理課長・主任学芸員
・開拓の村整備室長・学芸部長・特別学芸員を歴任
平成9年 定年退職
現在 北海道史研究協議会副会長、
北海道歴史文化財団評議員、登別市史編さん委員会委員

2. 所属団体等

日本歴史学協会、日本民具学会（名誉会員）、地方史研究協議会、
北海道地方史研究協議会（副会長）、
北海道歴史研究者協議会、北海道文化財保護協会など

3. 研究分野・主な著書〔共著を含む〕

〈研究分野〉 北海道近現代史（移住開拓史・民具史）

〈主な編著書〉

『北海道の風土と歴史』（山川出版社）、『明治大正図誌 北海道』（筑摩書房）、
『北海道の研究 5・8』（清文堂）、『クラークの手紙』（北海道出版企画センター）、
『北海道の馬櫛』（北海道開拓記念館）、『北海道民の成り立ち』（北海道新聞社）、
『新版 北海道の歴史 下』（北海道新聞社）、『北海道地名大辞典 上・下』（角川書店）、
『日本歴史地名体系 第1巻 北海道の地名』（平凡社）、『松平農場史』（旭川振興公社）、
『新旭川市史 第1～8巻』（旭川市）『札幌の地名がわかる本』（亜璃西社）など

4. 研究等における石狩市との関係

〈研究〉

関秀志「幕末期における庄内藩の留萌地方経営をめぐる諸問題(1)～(5)」（『北海道地方史研究』第90号・昭和48.2、『北海道史研究』第1・5・9・21号、昭和48.12、49.12、50.12、55.1）、

関秀志「幕末における蝦夷地と庄内藩陣屋」（北海道・浜益村教育委員会編『史跡庄内藩ハママシケ陣屋跡－平成元・2・3年度保存管理計画策定事業報告書』平成4.3）、関秀志「幕末の開拓地(1)～(8)」（道史協支部編『北の青嵐(67)(73)(78)(113)(126)(136)号、平成10.5～16.5））、

関秀志「庄内藩士の蝦夷地つり日誌(1)～(4)」（水交社編・刊『北海道のつり』475～478号、2010.6～9）

〈講演〉

厚田村民大学講演（昭和62.9）、

庄内藩ハママシケ陣屋跡保存管理計画策定委員会（平成2.8～3.11）、

石狩市民図書館冬の図書館講座講演（平成24.3、25.3）、

石狩市民図書館講座講演（平成26.3）、

いしかり市民カレッジ講演（平成28.10）、

庄内藩ハママシケ陣屋跡活用検討意見交換会（令和2.2）



